第 8 回所蔵品によるテーマ展

天心ゆかりの画家たち

会期　平成 24 年 2 月 3 日（金）～2 月 24 日（金）

	作家名	作品名	制作年(和暦)	備考
狩野芳崖とその弟子たち				
1	狩野芳崖	伏龍羅漢図	1885(明治 18)年	
2	岡倉秋水	慈母観音図	1918(大正 7)年	
3	岡不崩	菊花図	制作年不詳	
4	編者　岡倉覚平（秋水） 狩野政次郎	芳崖先生遺墨大観	1917（大正 6）年	
5	東京美術学校編纂 著作兼発行者　岡倉秋水	芳崖先生遺墨全集	1921(大正 10)年	
6	岡倉秋水	狩野芳崖作「鷹図」模写	1912 年頃～1950 年(大正時代～昭和 25 年)	
7	岡倉秋水	狩野芳崖作「雪山暮渓図」模写	1912 年頃～1950 年(大正時代～昭和 25 年)	
8	岡不崩	古典草木雑考	1976 年(昭和 51 年 8 月 10 日発行　復刻)	
9	岡不崩	朝顔図説と培養法	1909 年(明治 42 年 7 月 15 日発行)	
新日本画の基礎固め　～東京美術学校教授とその弟子たち～				
10	橋本雅邦	天保九如図	1897(明治 30)年頃	
11	寺崎広業	竹裡館図	1915(大正 4)年	個人蔵
12	小堀鞆音	捕鳥部万図（画稿）	19～20 世紀(明治～大正時代)	
13	川合玉堂	湖村春晴	1928(昭和 3)年頃	
14	島田墨仙	孔明秋夜祭北斗	1922(大正 11）年	個人蔵
15	山内多門	翡翠図	制作年不詳	個人蔵
16	山田鬼斎	鷲	1895(明治 28)年	
17	橋本雅邦	帝室技芸員橋本雅邦画 小学毛筆画帖乙編　巻之五	1902(明治 35 年)	個人蔵
18	巨勢小石	巨勢小石著　小学毛筆画帖　乙部	1889(明治 22 年)	個人蔵
天心直系の弟子たち				
20	菱田春草	温麗・躑躅双鳩	1901(明治 34)年	
21	横山大観	杜鵑	1904(明治 37)年	
22	横山大観	海－月あかり	1904(明治 37)年	
23	横山大観	横山大観よりアイナ・サーズビー宛英文書簡 1 通	1906(明治 39)年	
24	岡倉天心	岡倉天心より文部秘書官正木直彦宛書簡 1 通	1897(明治 30)年	
25	岡倉天心	岡倉天心より東京美術学校長正木直彦宛書簡 1 通	1901(明治 34)年	
26	岡倉天心	五浦即事	1904～1913(明治 37～大正 2)年	

27	菱田春草	落葉	1909(明治 42)年
28	木村武山	林和靖	1921～1924(大正 10～13)年頃
29	木村武山	阿弥陀来迎図	20 世紀(大正時代)
30	下村観山	馬郎婦観音像	20 世紀(大正 13 年頃)
31	下村観山	辻説法（画稿）	1892(明治 25)年頃
32	下村観山	魚籃観音（左幅）（画稿）	1928(昭和 3)年頃
33	下村観山	魚籃観音（中幅）（画稿）	1928(昭和 3)年頃
34	下村観山	犬図（画稿）	1928(昭和 3)年頃
35	今村紫紅	日蓮・辻説法	1903(明治 36)年
36	小林古径	摂取	1905(明治 38)年
37	安田靫彦	天之八衢	1939(昭和 14)年
38	前田青邨	鯉	1950～52(昭和 25～27)年頃
39	岡倉天心	「東洋の理想」ロンドン初版本	1903(明治 36)年
40	岡倉天心	「日本の覚醒」ニューヨーク初版本	1904(明治 37)年
41	岡倉天心	「茶の本」ニューヨーク初版本	1906(明治 39)年
42	岡倉天心	「茶の本」日本語完訳初版本	1929(昭和 4)年

第８回所蔵品によるテーマ展

天心ゆかりの画家たち

・狩野芳崖とその弟子たち

近代の偉大な美術評論家で、指導者、教育者でもあった岡倉天心（覚三）は文久 2 年 12 月 26 日（西暦 1863 年 2 月 14 日）、福井藩士岡倉勘右衛門の次男として生まれました。14 歳で入学した東京開成学校在学中には、アメリカ人教師アーネスト・フェノロサの古美術品収集や日本美術史研究に通訳として協力し、彼の美術理論を知り、日本美術に関する知識を得ました。明治 13 年（1880 年）に卒業した後は、文部官僚となりフェノロサらとともに古美術の調査、欧米視察を行い、図画教育については毛筆画採用を主張、東京美術学校の設立を推進するなど、若くして国の美術行政の中枢で八面六臂の活躍をみせました。

明治 17 年（1884 年）に組織された鑑画会は、新時代にふさわしい新日本画の創造を目指すフェノロサの画家指導の場でもあり、狩野芳崖や橋本雅邦らによる古来の技法に西洋の豊かな色彩や空間表現を加えた斬新な作品が出品されていました。それら意欲作は伊藤博文などの政府要人にフェノロサや天心の理想の有益性を印象づけ、その後設立される美術学校の方針に影響を与えました。

明治 21 年（1888）、狩野芳崖は新日本画教育実践の舞台となる東京美術学校の開校を待たずに亡くなりました。芳崖門下の四天王といわれた岡倉秋水（天心の甥・福井出身）、岡不崩（福井出身）、本多天城、高屋肖哲は師の意志を継ぐようにとの天心の勧めで東京美術学校の第一回生として入学しましたが、芳崖によって結ばれた弟子達はその繋がりを失うと徐々に離散していきました。秋水と不崩は岡倉校長の勧めにより美校を翌年退学し、毛筆画による図画授業の実現のため高等師範学校の図画教員となりました。のちに秋水は師芳崖の顕彰活動に打ち込み、不崩は本草学の第一人者となりそれぞれ天心とは距離を置いた独自の道を進みました。美校を優秀な成績で卒業した本多天城は、天心によって絵画科の助教授に抜擢されたものの、岡倉校長を糾弾する怪文書に端を発した東京美術学校騒動では迷いながらも天心や、天心に殉じて美校を辞職

する教授連とは袂を分かつことになりました。おおらかな性格が芳崖から気に入られていたという高屋肖哲は美校卒業後、石川県工業高校の専門画学部の教諭や、天心のいなくなった母校でごく僅かの期間図按科の助教として教鞭をとりますが、その後市井の画家としてもっぱら仏画を描きました。彼ら四天王も芳崖がもう少し長生きしていれば、また違った展開を見せていたのかもしれません。

・新日本画の基礎固め　～東京美術学校教授とその弟子たち～

東京美術学校二代目の校長であった岡倉天心は絵画科教授陣の刷新強化を徐々に行い、明治 26 年（1893 年）に結城正明（狩野派）、27 年に巨勢小石（大和絵）が辞職すると、同年に下村観山ら美校卒業生を積極的に採用しました。明治 29 年（1893 年）に日本画革新派の活躍の場となる日本絵画協会を創立すると、同会の有力メンバーも東京美術学校の指導陣に採用し、既に教授であった橋本雅邦（狩野派）、川端玉章（円山派）、山田鬼斎（彫刻）、助教授の下村観山に加え、西郷孤月、本多天城、横山大観や菱田春草ら学校派をはじめ、在野の各画塾の将来性のある逸材も物色し川崎千虎門の小堀鞆音、平福穂庵門の寺崎広業、川端玉章門の山田敬中ら青年画家たちを採用しました。これら初期東京美術学校教授陣は天心の理想を支えた人々であり、学校のみならず彼らの主宰する画塾においても理想の実現のため力を尽くしました。とくに橋本雅邦の画塾からは川合玉堂、島田墨仙、石井林響、山内多門ら優秀な人材が輩出されていたことは見逃せません。

・天心直系の弟子たち

美術学校では明治 29 年（1896 年）に西洋画科と図案科が新設されて以後、天心の指導路線に対する批判が急速に高まりました。天心は明治 31 年（1898 年）美術学校辞職に追い込まれ、橋本雅邦をはじめとする日本画科の多くの指導陣も岡倉校長の辞職に殉じて連袂辞職に踏み切りました。天心は同年七月に在野美術団体・日本美術院を創立、ともに美校を辞職した人々とともに新たな美術運動を試みました。しかし正員間の結束の緩み、一部の画家の急進的な試み（朦朧体）に対する不評などで好調は長く続かず、数年後には早くも不振に陥ります。

明治 37 年（1904 年）天心は横山大観、菱田春草、六角紫水を伴い渡米し、日本では不評であった大観や春草の朦朧体の作品を欧米で売ろうという試みで展覧会を企画、高値の作品から売れ大成功をおさめました。今回展示の「杜鵑」や「海―月あかり」は、その当時アメリカで描かれた大観の作品で天心の後援者であったニューヨークのサースビー姉妹旧蔵品です。

天心帰国後の日本美術院では多くの正員が去っており、ついに天心は明治 39 年（1906 年）横山大観、菱田春草、下村観山、木村武山の 4 人とともに日本画の研究所を茨城県五浦（いづら）に移転しました。天心自身はボストン美術館の東洋美術部の仕事で 1 年の半分を国外で過ごし、英文で日本文化や思想を西洋に紹介する一方、今村紫紅や安田靫彦、小林古径など次代を担う青年画家にも絵画の理想や心構えを伝え続けました。明治 40 年（1907 年）から文展が始まると、五浦の画家たちは研鑽の成果を示して画壇を制し、その後も目覚ましい活躍を見せました。

大正 2 年（1913 年）、日本の美術行政や美術教育の基礎を築き、さらに西洋にむけて日本文化を紹介した偉才岡倉天心は新潟県の赤倉山荘で亡くなりました。日本美術院はその翌年、天心の弟子たちによって再興され現在に続いています。